【呉市立蒲刈小学校　令和６年度　１１月号】

蒲小だより

学校教育目標

未来を拓く児童の育成

文責　校長　山本　智文

子どもが心をひらく教師の「聴く力」

私が指導主事，管理主事をしている時代，よく学校を訪問していた。

学校にうかがって教室に一歩足を踏み入れると，「思いやりをもとう！」とか，「人の痛みに共感できる仲間になろう！」等の学級目標を目にすることがあった（どこの学級にも目標は掲げてある）。しかし，この目標も子どもたちの日常的な関わりが希薄であったら“絵に描いた餅”のスローガンで終わってしまう。「思いやり」を「共感性」という言葉に置き換えると，関係性のないところに“共感性”は育たない。自分の共感力にためらう前に，まずは，“関わろう！”ということである。良くも悪くも，とにかく関係性をつむいでいかなければ，自分に引き寄せて「思いやる」という共感のはたらきは起こらないのである。

そして，関わりを手がかりに相手の心の世界を共感していくその“一連の作業”が「**聴く**」ということではないだろうか。よって，子どもたちとの関係性を深めていくためには，具体的に「**聴く**」という営みが鍵となる。そして，教師の「**聴く力**」が，子どもたちの他者への「共感性」を育てていくと考えている。

ここで，親と子，担任と児童との関係で思い返してみると，「離れていれば恋しくて，近づきすぎるとうっとうしい」のが，他人事にはできない身近な間柄の人間関係である。寂しいのも辛いが，束縛もされたくない，どちらにも片寄ることなくほど良い距離でいてほしいと思うのが，お互いの心ではないだろうか。このことを「**聴く**」という関係でみると，「私の心の扉をひらくようにもっと深く聞いてください」という願いがある一方で，「そんなに踏み込んでこじあけるように聴かないでください」という気持ちもあって，いずれも大切にしてほしいということである。だから，「子どもたちが心をひらく教師になろう！」を教師の指導性も入って，過剰に意識すると「子どもたちの心をこじ開ける教師になろう！」になりかねない。そこで，自ら「子どもたちが心をひらきたくなる教師」としての「聴き方」に尽力していけば，その後の“共感力”の育ちは，子どもたち本人にまかせておけば良いのである。

「深く聴こう」も，度を超すと教師の枠組みにとらわれた聴き方になり，話す子どもにはうっとうしくなって，本当のところは心をひらくことなく，教師の顔色をうかがった話し方になったりするのである。これでは，心をひらいているようで，ひらいていないのである。

では，子どもの主体性，内なる世界を奪うことなく安心して「心をひらきたくなる教師」になるためには，どんな時に，どのような聴き方に努めていったらよいのだろうか。

私の息子が中学２年生の時，私に向かってこんなことをつぶやいたことがあった。

「僕は，中学生になったからあまりしゃべらなくなったんじゃないけん。不安や悩みはいっぱいあったよ。でも，父さんは，僕が話したくなるような聴き方をしてくれんかった。話したくなくなるような聞き方ばっかりじゃった。一番嫌じゃったのは，僕が話している途中に『結論から先に言え』とか，『だから何だ』『つまり，何が言いたいんだ』と言われた時じゃった...」。

私の息子に対する聞き方が，息子の関わる自信をすっかりなくさせてしまい，心の寂しさを訴えてきたのである。関係が近すぎると，いつの間にか粗雑な聞き方にもなり，だからといって，今度は心を傷つけてはいけないと意識すればするほど，“疎遠な聞き方”になってしまう...。関わり続けていくことを覚悟すれば，「対立やトラブル，聞き方を恐れない」と思いつつも，何となく小心さばかりがつのってしまい情けない気持ちになってしまう...。子どもをもつ父親としての私もそうだが，“あれはあの子の個性”ではす

ましてはおけない日々を過ごしている教師も，同じ聴き方の苦悩をかかえているのではないだろうか。
　さて，愚痴や弱音はこれくらいにして，「**聴く**」という字を手がかりに「**心をひらき話したくなる聴き方**」について考えてみる。「きく」には，「聞く」（ヒアリング），「訊く」（アスキング），「聴く」（リスニング）の３つがある。子どもたちには，教師の聴く力を支えに，現実を否定しないで肯定的に生きてほしいものである。そのために，子どもが教師との関わりの援助を受けて「自己の内面」と向き合い，現実的に考えていく中で，「軽い話は重く（深く）し，重くなりすぎた話は軽くしていく」きき方にふれるのが良いと考えている。不適切なたとえ方だが，上手な魔法のかけ方として，「言葉を正確に聞く」「感心を寄せるように訊く」「気持ちを汲んで聴く」を常に我々が意識し，問いかけていく中で，**“軽くならず，重くならずのバランスのよいきき方”**ができるのではないだろうか。

　私たち教師は，これまでの自分たちの実践を振り返り，「**子どもの心に寄り添う教師の“人間力”**」の向上に向け，より一層磨きをかけていく，このことに真摯に向き合い続けていくことが「めざす教師の真の姿」であると考える今日この頃である。

学習発表会の練習に熱が入る！

　１１月１６日（土）に開催される「令和６年度呉市立蒲刈小学校学習発表会」に向けての練習に日に日に熱がこもってきました。１０月２９日（火）の全校朝会で，私は学習発表会に向けての心構えについて次のことを子どもたちに話しました。

　観る人々の心を動かすためには，ここにいるみなさんはどういうことを意識して練習に取り組んだらよいと思いますか？　答えは，漢字四文字です。ただし，今日，伝えたい言葉は，みんながいつも意識している『相手意識』ではありません。しかし，相手意識をもつことは今回の学習発表会でも当然大切なことです。さて，何だと思いますか？
　それは『**一生懸命**』という言葉です。
　演技には，一人一人の姿や動き，声の抑揚，目線，身振り，手振り等，さまざまなことが要求されます。観る人の心を動かす，感動させるためには，一人一人が“一生懸命になる”ことが大切です。「一生懸命」という言葉にかくされた価値を，この学習発表会を通して，ぜひ，みなさんに感じ取ってほしいです。「適当にやっても学習発表会は終わる..」，「一生懸命やっても学習発表会は終わる..」・・みなさんは，どちらを選びますか？
　校長先生は，いつも自分の心に言い続けている言葉があります。それは，次の言葉です。
　「子どもの姿で勝負する！」です。みなさんの“一生懸命な姿”が多くの人の心を動かすことができるよう，心から願っています。蒲小健児なら必ずできます。

めざせっ，一生懸命！

一生懸命，練習に取り組む子どもたちの姿

　子どもたちは**「さまざまな行事」**を通して大きく成長していきます。
　校長室でパソコンと向き合っていると，教室のあちらこちらから子どもたちの**“元気のいい歌声”**が聞こえてきます。「蒲小の子どもたち，頑張ってるな！」とうれしく思う瞬間があります。今年度の子どもたちの成長の一端を，ぜひ，観にいらしてください。楽しみ，楽しみ...。

これから蒲刈小のめざす学習スタイル！
～ 真の学びに向かう新たな挑戦 ～

特集

今年度，本校では，蒲刈中学校区の授業研究で，３・４年生が算数科の授業を公開しました。授業研究を行うことが決定した後，担任の住元教諭と**「本校における“これからの学力向上に向けた学びのスタイル”」**について議論を重ねてきました。本校が今後めざす授業スタイルは，キーワードとして挙げると**「自己調整学習者の育成」**です。少しかた苦しい内容になるかもしれませんが，できるだけかみ砕いてお話いたします。

「自己調整学習者」を，本校では，次のように整理しました。

> **教師（指導者）により，自分の学習（学び）をコントロールされている状態ではなく，学習者である子ども自身が自分の学習（学び）をコントロールしていると感じている児童。**

要するに，これまでのような「教師に指示されて何の違和感を感じることなく学習を進める」という指示待ち（受け身）の児童の育成から脱却するということです。

多くの学校では，依然としてこの「学習スタイル」で授業が進められています。このスタイルがいけないと言っているのでは決してありません。**「子どもたちの“やる気”に火をつけ，生涯にわたり自分の設定した目標に向かって自律的に取り組み続ける人材の育成」**を目指していきたいのです。　👉**「自律」・・支配や制約を受けずに独り立ちすること**

「今さら何を言っているんだ。そう思っているなら，なぜ，もっと早くからチャレンジしてこなかったんだ。」とお叱りをいただきそうですが，自己調整学習者を育てていくためには，いろいろなハードルがあるのです。一つ挙げるとしたならば，教師（指導者）の意識の問題です。私も含めて，多くの指導者は，子どもたちのやる気に外から火をつけようとしていた面があったと思います。私が設定したルールや教師という「圧」等により，やらざるを得ない状況にしていました。私の中のどこかに，「学級を崩したくない」，「子どもたちが私の言う事を聞き，まとまりのある学級と思われたい」等の意識が働き，子どもたちを「どうコントロールするか」考えていたのだと反省しています。

私は，令和５年度の人事異動で蒲刈小学校に校長として赴任しました。ご存じの通り，蒲刈小学校は，３・４年生，５・６年生が在籍する人数の関係で「複式学級」です。複式学級の学習スタイルは，２学年の児童の学習を担任１人が担うことになります。当然，一方の学年の学習指導を行っている際は，もう一方の学年の児童は指導者不在の中で学習を進めることになります。私は，「これだ！」と思いました。**「指導者が来るのを何もしないで待っているのではなく，指導者がいなくても『自分たちで学びを進めていく』という環境がここには存在しているじゃないか！」**と，改めて気づかされたのです。私のやる気に火がつきました！

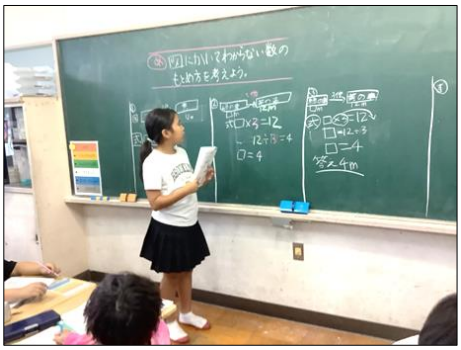
そういう状況の中で，３・４年生が授業公開することが決まったので，もう，じっとしてはいられなく，住元教諭に自分の思いをぶつけたのでした。住元教諭も私の考えと近いものがあったので，「どういう授業を創っていこうか？」と盛り上がっていったのでした...。

どんな子どもも，「学びたい」，「成長したい」という欲求を必ず持っているはずです。その思いを「引き出し，伸ばす」のが，教師の役割です。

１０月３日，蒲刈中学校区の授業研究が本校で開催されました。広島大学附属東雲小・中学校長，広島大学大学院教授　松浦武人先生を講師としてお招きし，小・中学校の全教職員が研修にのぞみました。授業を公開する最大のねらいは**「複式学級の学習指導を基盤としたこれからの学習スタイルの質的改善」**です。“質的改善”の中で，指導者に問われてくるのが**「教師の出場」**です。「出場（でば）」とは，指導者が子どもたちの学びの状況を瞬時に判断して，「どのタイミングで介入していくか」，「逆に，あえて意図的にどこまで介入しないか」を決める動きのことです。そのことを指導者で

ある住元教諭が意識し，子どもたち自身による「主体的な学び」を展開していきました。授業を参観した中学校の多くの先生方が**「子どもたちで学習を進めている」**ことに驚きを隠せないでいたのが印象的でした。講師の松浦教授からは「複式学級の視点を踏まえた学習の在り方」についてご指導いただきました。研修終了後，松浦教授から「蒲刈小学校の授業スタイルは，広島大学附属東雲小学校でも目指し，多くの教員が研究実践を積んでいます。しかし，一長一短にはいかないのも事実。自己調整学習者を育てていくのには時間がかかりますね。でも，蒲刈小学校の子どもたちなら，先生方なら，できると思いますよ。」と期待を込めて評価していただきました。

「子どもたち自身もやる気に火をつけたい」という願いを絶対もっていると思います。“強引につけた火”はすぐに消えてしまうけれども，**子ども自身が「つけたい！」と願い，灯った火**は，その後も灯り続ける...。我々教師は，このことを日々意識しながら，「本校における“これからの学力向上に向けた学びのスタイル”」の構築を目指していきます。楽しみ，楽しみ...。



ここで，授業後の児童の感想を紹介します。**「自分たちで勉強を進めていくことをどう思いますか？」**の質問に対して，「**みんなと話し合って進めるのが楽しい**」，「**成長ができると思う**」，「**他の学校と違っていて，ぼーっとしているより，自分たちで進めるのがいいと思う**」，「**いい学び方だと思う**」，「**自分で勉強したい**」等が書かれていました。また，**「なぜ，そう思うのですか？」**とたずねたところ，「**自分たちで勉強を進めると，学力が高くなるから**」，「**みんなと話合いながらやるともっと楽しくなるから**」，「**自分で授業を進める力がつくから**」，「**自分たちでしているから，学ぶ力がついていると思う**」，「**他の学校と違う学び方だから。違う学びができるから**」，「**先生がずっと進めるより，自分たちで進めているほうが，自分たちのためになるから**」等の子どもたち目線の思いが書かれていました。

全国の学校現場において，「通常学級においても複式学級の指導方法を積極的に取り入れるべきだ！」という気運が高まってきています。１０月２４日，２５日に徳島県で開催された「第７６回全国連合小学校長会研究協議会」の場でも確認することができました。子どもたち一人一人が「学習リーダー」となり，自分たちの力で「学び」を展開していく。指導者は，**「どこで出るか，どこまで出ないか（教師の出場）」**を見極め，**“子どもたちの学びの伴走者”**として常に寄り添い，「子どもたちの学びを評価し，価値づけ，さらなる高みをめざしていく」という営みを丁寧に展開していくことが求められていると考えています。